

菊五郎の伊勢音頭（二見ヶ浦と油屋の型）

川尻清潭

〈出典：「演劇研究」第1号、昭和23年9月〉

私が初めて「伊勢音頭恋寝刃」を見たのは、明治二十九年六月の明治座でした。五代目菊五郎の貢、栄三郎（後の六世梅幸）のお紺、秀調（先々代）の万野、菊之助（先代）の林平、家橘（後の十五世羽左衛門）の万次郎、松助（先代）のお鹿、寿美蔵（先代）の喜助と云う役割で、菊五郎の貢と、菊之助の林平と、家橘の万次郎だけが、うろ覚えに目に残っています。

其次ぎが同三十四年七月の歌舞伎座に、同じく五代目菊五郎の貢、芝翫（後の歌右衛門）のお紺、家橘（後の羽左衛門）の林平、染五郎（後の幸四郎）の喜助、松助（先代）の万野、市蔵（先々代）のお鹿、菊三郎の万次郎と云う役割でしたが、此時の五代目の貢のうまかった事は、全くしみじみと感服してしまいました。当時の楠木清方さんの評にも、「古今無類の絶品、廉々の極りのよさは、亡き芳年翁を起しても、此形は写されまい」とまで褒めた位、其清方さんが此油屋の貢のスケッチを、雑誌「歌舞伎」紙上へ掲載された事があって、それが足袋を履いた絵であったのを、私が『貢は素足でなければいけない』と駄目を出して、清方さんも『そうでした』と承認され、其後十五世羽左衛門も、素足で勤めていました。処が今度の六代目の油屋の貢が、白足袋を履いているので、何の根拠があるのかと聞いて見ると、先代が足袋を履いていた事が、判然と写真に残っているのを見せられて、論より証拠で一応降参しました。しかし其時代の私は、既に一人で五代目の部屋へも遊びに行つて、よく芸談を聞いたもので、現に此時も五代目の口から、『油屋へ出る貢は色身だから、足袋を履いちゃア色気がねえ』と、慥にそう教わった言葉を覚えているので、恐らくは写真を写す時だけ、足袋を履いたのではあるまいか、どうも腑に落ちないのですが、紋付の羽織を着て足袋を履かないのもおかしいとの説も出て来たものの、そうかと云つて一度正面の暖簾へ入つて、羽織を脱いで来る時に、爰で足袋も一緒に脱いで出るのは急がしい事乍ら、理窟ではなくそうでもしていたのではないのでしょうか。相当に気を付けて見ている、いざ舞台通り間違いない型を、一から十までくわしく書いて置こうとなると、斯んな一寸した事までが見落してある訳で、多分斯うでもあつたらうといひ加減な想像を書くと、後世へ飛んだ誤りを伝える事もあるでしょうし、案外手順のいい工夫が出来ているかも知れないので、精々古い役者に聞糺しても見ましたが、今の処まだ確証は上りません。但し花道へ入つて二度目の出には、羽織を脱ぎ足袋も履かないのが当然の事で、六代目も勿論そうしていました。

もう一つ変つてゐる事は、五代目は油屋の場の衣裳が、白上布へ十の字緋の着付に、麻の丸縹に水浅黄の襟を用い、私が見物した日には、愛想づかしが済んで立上ると、膝の折かがみの部分へ、グツショリ大きく汗が滲み出して、二度目に刀を取替えに来る所も、濡れた儘の衣裳で勤めていたのを、気の毒のように思った事を覚えています。

此日に私が家橘の部屋へ遊びに行くと、『追駈けの場の林平で、君の土間へ割込むから、

僕の入るようにして置いてくれ給え』と云う事でした。これは舞台で林平と大蔵丈四郎とが、追駈けっこをする時に、昔は林平役者が見物席へ隠れて、大蔵丈四郎に探させると云ったような、ふざけた仕科をしたもので、役者と見物との親しみがあって、ひいき客に喜ばれたのですが、私共の家族はいつも、六の側の二三の土間で見るのが定めでしたから、斯んな場合には飛込みいい場所でもあった訳、家の人達も皆んな嬉しがっていました。

尚私は『伊勢音頭恋寝刃』を見る前に、明治十六年十月の新富座で、これは河竹黙阿弥が書替えた、『千種色音頭新唄』と云う、福岡貢を見た事があります。五代目が伊勢土産として、彼の地で聞いた九人斬の話、実録風に仕組んだもので、菊五郎の貢、源之助のお紺、左團次の万野の役割で、油屋の場を廻して大広間を見せ、各花柳界から数十人の芸妓が、地方と踊り子に出演して、舞台前と両花道へ朱塗の手摺を糺り出す大仕掛け、いずれも盃流しの揃いの衣裳で、本花道を出た者は仮花道へ、仮花道から出た者は本花道へ、入替って入るだけの事でしたが、それが頗る綺麗であったのと、左團次の万野が目に残っているのと、菊五郎の貢が大詰の幕で、下手寄りの二階で切腹をした所だけが記憶にあります。

菊五郎歿後では、先代羽左衛門の『伊勢音頭』が一層派手な芝居を見せ、別に仁左衛門の大阪型、宗十郎の親譲りの型なども見ましたが、概して東京では菊五郎型が多く行われています。五世菊五郎型の手本は、三世菊五郎の工夫と、五世彦三郎の演技を土台に、更に研究を重ねて、天下の逸品に洗い上げたもの、六代目は大正十一年九月の市村座に、上演の手筈であった所、大震災の為に中止となって、今回は初役の事とて例の凝り性から、親父の型も悉く調べていましたし、五代目が最終の貢を勤めた時、六代目は十七歳でしたから、一ト通りの型は目にも残っている訳で、充分自信もある事と聞いて見ると、『親父はうま過ぎましたよ。親父の貢を見ている人の目にかかっちゃア閉口です。逆もあは行きません。卑怯で云うんじゃアなく、全くの所追付けないのです。下手な真似をするよりは、せめて少しでも貢になる方でやりましょう』と云った位、舞台の上にも写実が加わって、五代目写しと云うよりは、六代目の貢として勤めていました。

されば油屋の場の貢の拵えにしても、初めの間は五代目型の、白地へ十の字緋の着付けを染めさせて使用していたのを、後には浅黄無地に、五つ所の漆紋に改めたなども、『御師』と云う役柄の方へ就いたのでしょう。

今回の場割は『通し狂言』として、序幕相の山の間、妙見町旅籠屋の間、同返し野道追駈けの間、同地蔵前の間、二見ヶ浦の間、二幕目太々講の間、大詰古市油屋の間、同奥庭の間となっていますが、原本では最後に伯母の内の間が付いていて、貢の切腹で終る事にしてあります。

殊に今度は東京の舞台に久々の、『太々講、孫太夫内の間』の出たのが珍らしく、取分け六代目が正直正太夫を勤める事に、本人も興味を持ち、又観客も期待をかけた次第、私は不幸にして今まで此場面を一度も見ただ事ありませんが、近年では伝五郎の彦太夫に、勘五郎の正太夫が面白かったとの話。それらの型の伝わっているのを、古い人々から聞出したらしく、六代目も精々工夫を凝した痕は、演技の手順を見てもよく分りますが、其六代目の計画

通りに周囲の呼吸が筋って来ない所もあって、それがじれったいのもあろう、先きへ乗出して下り所もありました。とは云うものの、太々の金が祓の箱の中から落ちる所へ、彦太夫と正太夫の万歳才蔵の振りを入れたり、又幕切に彦太夫を猿廻しに遣って、正太夫が猿のおかしみをする等々は、芝居が十日目も過ぎてから、新規に考えた入れ事であって、此役に就いては舞台をよく面白くしようとの、殊勝な心掛けが見えていました。

扱前置きが長くなりましたが、これからお話をする貢の型は、五代目菊五郎の名演技を土台として、六代目の演出も取交せて話そうと思いますが、貢の出場所は妙見町の旅籠屋が始めで、此場には別に演所^{しどころ}はありませんが、それでも五代目のスッキリとした装形^{なりかたち}、実事でなく侍でなく、所謂ピントコナの風格、駕から出て駕舁に酒代をやる間だけでも、此狂言の主要人物である値打ちを見せたもので、藤浪左膳と万次郎と三人で奥へ入り、二度目に出て来る時には、万次郎の荷物の心で、小さい風呂敷包を片襷の形に背負って、小田原提灯へ灯を入れて持って出るなども、役柄を現わす用意が行届き、万次郎の身柄を預って、二見の知る辺へと花道へ入るだけです。今度は爰の道具を、常足の二重屋体にして、半舞台が土間になっていましたが、いつもは薄縁敷きで、貢と左膳との対話は上下^{うへした}するのが本格、又時に通しの敷台を付けた、玄関先きの心でする事もあり、そうして此次ぎが『追駈け』と『地蔵前』の場になります。

爰で改めて貢の拵えを云えば、本多鬚鉢前鬢^{びん}の鬘、黒手黄八丈の着付花色絹の裏、藍鼠縮緬の丸縹絆に黒八丈の襟、黒八丈の帯を割挟みに締めた上から、茶糸丸打の上締、大小ざし、唐扇、紺足袋に麻裏草履、胴を紐で括った風呂敷包みを、片襷のように背負っています。以下各役の台詞は便宜上要領だけを摘んで置きますから、其積りで御覧下さい。

それから二見ヶ浦では、浪の音、只合方の鳴物で、花道を出て来る貢は、小田原提灯を右手に提げ、左手で着物の上ん前を一寸軽く端折り、万次郎の先きへ立っていつもの所まで来て、兩人台詞があつて舞台へ掛り、二見の景色を見せている所へ、花道から大蔵が駈出して来て、万次郎を見て驚き、貢に突当って上手へ逃げて入るので、貢は『とんと気違いの沙汰じゃ』と見送る。万次郎が『今の奴が下坂の刀を質入させた大蔵じゃわいのう』と云うので、貢が『惜しい事をいたしました』と云う。此時又花道より林平が駈出して来て、万次郎を見て、切れた手紙の片端を渡すので、万次郎が『そうして様子は』と聞くのを、『そこ所ではござりませぬ』と、貢に突当って上手へ入る。貢は『これも半気違いの沙汰じゃ』と跡を見送りますが、此二人に突当られるのも、五代目は一度は右一度は左と形を替えて見せたものです。万次郎は手紙を貢に渡し、貢の持った提灯を受取って差出すと、貢は其火影で手紙を読み、『乱札を以て申し入候、弥其地に於て下坂の刀手に入り候⁽⁷⁷⁾はば、早速帰国あるべく候、跡は破れて名宛はなけれど(六代目は以上の台詞を省く)、詮議の手掛り、コリヤよい物が手に入りましたわえ』と懐中へ入れる。爰へ花道より丈四郎が駈出て、万次郎を見て逃げようとするのを、貢が下手へ突退ける。上手より以前の林平、破れた手紙の片端を口に咬え、大蔵が其跡を追かけ乍ら駈出る。万次郎其手紙を受取り貢に渡す。貢は手紙を読もうとする、万次郎提灯で照らす、丈四郎提灯を打落す、貢は中央で万次郎を後ろへ囲った見得。

此時手紙を咬えて極るのが古い型ですが、咬えない人もあります。忍び三重の頭、木の葉落しの合方、だんまり模様になって、上手から丈四郎が貢に探り寄るのを、貢は万次郎と間違えて労る、丈四郎が『大蔵か』と云うので、貢は其頭を打つ。今度は上手から万次郎が貢に探り寄るのを、間違えて手を捻じ上げる、そこへ又下手から林平が探り寄るので咽喉を締め、それと知って両人の手を握らせ、『奴殿、爰は危い、少しも早う』と万次郎を托し、左右から刀で斬って掛る大蔵丈四郎を引付ける。林平は万次郎の手を引き花道へ掛り、『若旦那、ござりませ』と、まだ夜の明けない心で刀を抜いて差つけ、闇の中を搔廻すようにして、送り三重で向うへ入ります。今回は右のだんまり模様も、一層略してありました。

貢はそれをすかし見て、『これでようよう落付た』と手を離すので、大蔵丈四郎が刀で足を払うのを、チョンチョンチョンと跡へ下って、両手を後ろへ廻し、帯を締め直すような形でツケ入りの見得。時の鐘を打込むと云う詠です。爰で五代目は腰に付けている左右の褌を引上げて、上締めへ挿み込んで端折るのが、丁度あずまからげの形になる工夫ですが、其後の羽左衛門も爰までは凝りませんでした。

それから貢は手紙を披いて、これを読みたい心持で両手で持ち、高く持上げて上手へ行き下手へ行きする間に、大蔵は其手紙を持っている貢の両手の間へ、下手から刀を突込むのを、貢は此時手紙の片端を離すので、スカを喰って上手へ走って筋斗返りを打つ。今度は丈四郎が上手から、同じ仕科をしてスカを喰って下手へ走って筋斗返りを打つ。それが近年では端敵役者に、筋斗の返られる者がないので、手紙に添って刀を付けて廻り、空を走って前へのめる事になって、以前の面白さがなくなりましたが、其跡で大蔵丈四郎が刀を合せ、それが外れて上手と下手へ行き、兩人共空を斬って受ける形、又背中合せに刀を担いだ見得で、尻をぶつつけ合って前へのめる所などは、現在でも昔の型が行われています。

此間に貢は早く手紙を読みたい心で、高く上げてすかして見たり、又は浪打際へ行って、打寄せる浪頭の白さを明りに、手を低くして見る仕科などは、昔としては新らしい工夫であったのでしょうか。其中に東が白んで、正面の水平線へ^{あかてる}赤照（赤色の花火）を焚くので、『嬉しや日の出』と云って、大蔵丈四郎の二人を腹這いに重ねて、これへ腰を掛けるように、尻を預けた後ろ向の反り身で、両手に手紙を披いて差上げ、『名宛は徳島岩次殿、蜂須賀大学より』と読んで立上り、大蔵を下に置いて其左肩へ右足を掛け、左手で丈四郎の手を捻じ上げるので、丈四郎は立ち身の後ろ向きになる形、貢は『読めた』と云って、手紙を見せびらかすように振るのを、下の大蔵が両手を出して取ろうとする、貢は手紙を振上げて極るのが木のかしら、下座の『トトジャン、伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ』の長持唄、又手紙を振って見せ乍ら、正面へ旧式に紅絹張の日の出を見せて幕ですが、五代目は右の長持唄の三味線の掛りがやかましく、毎日囃子が呼付られては、小言を喰ったものだと言います。後年には紅絹張の日の出をやめて、菊五郎歿後には照明の後光を現わしたり、又二見ヶ浦の岩を丸物に造って、切出しの浪を浪布に改め、其中へ人を入れて浪を動かして見せたり、上下で鶏笛を吹立てたりするのもありましたが、斯う云う舞台は浪などを動かす必要もなく、今度は浪手摺を殖やした事に依って、深味を見せてありましたが、飾り方は寧ろ古い式であった

のが、却ってよかったと思っています。

二見ヶ浦の次ぎに『太々講』があって、此場へ出る貢は純二枚目ですが、今度は菊五郎が正太夫を勤めているので、此場の貢は羽左衛門が替っていますから、爰には略して、すぐに『古市油屋の場』へ移ります。

油屋の場の貢の拵えは、鬘は前と同じく本多髻鉢前鬘、着付は白上布十の字拵、(六代目は縮緬へ十の字の染拵)白麻の丸縹絆に水浅黄の襟、御納戸献上の挿み帯、黒縮緬の単羽織に杏葉菊の五つ所紋、(丸に三つ鱗、乃至は瓜の中に三つ鱗を用いるもあり)、銀鼠丸打の紐、素足に八幡黒の鼻緒の雪駄、一本差、白扇と云うのが五代目の好みです。羽左衛門は上布の硬張るのを避けて、壁御召に井桁拵を染めさせて使用し、羽織には櫓紋の橋を遣いました。

油屋の舞台飾りは、一面の平舞台に丹壁のような座敷、欄間は盃流しの透かし彫、上手一間の二階屋体、近年ではこれに葺戸が立ててありますが、古くは障子でしたし、下手二枚格子の出入口、『油屋』の掛行灯ですが、昔は世話格子を用いました。正面に盃流の模様のある暖簾を掛け、下手の衝立にも曲水の絵が書いてあります。仁左衛門は爰で一度舞台を廻して玄関先きを見せ、其方に暖簾が掛けてあって、『油屋』と書いた大行灯や衝立は、いずれも古市の写実でした。

幕明きの鳴物は、『花に遊ばば祇園あたりの色揃い』の替唄、これは『忠臣蔵七段目、一力の場』で遣うのと同じ曲、江戸の騒ぎ唄と同様のもの、替唄の文句は『伊勢に遊ばば土地も古市玉揃い……』です。

今度の舞台では、すぐに正面からお岸が出ると、同時に下手から万次郎が出て、門口の内と外とで話合う、其処へ仲居の千野が来るのでお岸は万次郎を遠ざける、お岸は『早うござんせいなア』と云って奥へ入る。踊地の鳴物で花道から貢が出る順序。貢は扇をひらいて、左の袖口へ風を入れるような形に、一寸左手を浮かして煽ぎ乍ら、稍足早に心急ぎの気持で、何の台詞もなくすぐ舞台へ来て、門口を明ける。お岸がそれを見て『オオ貢さん』。貢『お岸じゃないか』と扇遣いをし乍ら立話になり、お岸は万次郎は来たが大林寺の方へ遣ったと云うので、貢が行きかけるのを止めて、行違いになるといけないから、爰で待てと云う。貢は下坂の刀が手に入った事を語り、『爰にさしているのが青井下坂』と、扇で刀の柄を叩いて見せる、尚お岸が、『阿波の客が、お紺さんと私を身受けして、明日は本国阿波へ連れて行くと云っているわいなア』と云うのを聞いて『そんならお紺もそなたも身受して、明日は本国阿波へ出立、困った事じゃなア』と座敷へ上る。其処へ又千野がお岸を迎いに来て、奥へ連れて入って了う。貢一人跡に残って、台本には長い台詞があるのを言わずに、『コリヤ滅多に爰は動かれぬえ』と時代に言っ、真ん中稍下手寄り、煙草盆の置いてある前へ座って、帯にさしている刀を取って左脇へ置き、跡は大体扇遣いをしています。

此時正面暖簾の中で、『ナニ貢さんがござんしたとえ、わしが行ってお断わりを言おうわいなア』と、蔭の声を聞かせ、『秋の七草』唄入の合方で仲居の万野が出て、団扇遣いをし乍ら貢の上手へ座り、『お気の毒じゃが、今夜はお紺さんはなりませぬぞえ』と云う事から、『芝居初日へ行くしゃんして、戻りは大阪屋でエラたてやといなア』、とか又『お客と云う

は阿波の侍、もうもう粋と云うものは少しもござんせぬ』と聞かせ、『舞の場へ顔出しなどしておくれでない、わしが迷惑するわいなア』、更に『ほんに一文にもならぬお客にかかり合っているのは……』とのいやがらせまでを云い、尚昔は貢が『それでは酒を出してくれまいか』と云うと、『お酒はやまでござんす』との断りを云ったものでした。そうして『それ程茲に居たくば、お紺さんの代りに替り子と呼ばしゃんせ』と云うので、貢が『万野とした事が、わしにはお紺と云う者があるではないか、それに替り子が呼べるものか』万野『ならぬかえ、替り子と呼ばねば帰って下さんせ』。貢『それじゃと云うて』。万野『そんなら替り子と呼ばしゃんすか』。『サア』。『サア』。『サアサアサア』の繰上げになり、貢は仕方がなく、『ええそんならどうなりとしたがよい』と云うので、万野は仕てやったりと計り、打って変って忽ち愛想よく、『貢さん、ようおいでたなア』と団扇の風を送るので、貢は『イヤ、現金な奴じゃなア』と云います。爰で多賀之丞の万野は暖簾口まで行って、手を叩いて料理を誂える仕料があつて戻り、貢の腰の物を預ろうと云って、刀へ手を掛けるのを、貢は振払って刀を右膝の脇へ置直し、『此刀は大切な品故、滅多には渡されぬ』と断るのを、万野は『伊勢の茶屋では昔から、腰の物を預る慣わせ、それを預けられぬとならば、こっちもお客にはなりませぬ程に、早ういんで下さんせいなア』と、繰上げで憎体に断ります。

其処へ後ろの暖簾の中から、喜助が、『そのお腰の物は、私がお預り申しませう』と云って出て、貢の下手へ座ります。今度の猿之助は爰で、襷を外し前掛を取る仕料をして、料理人の身分を見せて、『私も男のはしくれ、お預り申すからは、お氣遣いはござりませぬ』と云うので、貢は右手で刀を横一文字に持って、喜助に預ける。万野が『仲居はあつてもものうてもじゃ』といや味を云い、『貢さんの替り子を、見立てて置こう』と、『残る鶯』の唄で奥へ入る、貢が『わしも奥へ』と立掛るのを、喜助が『申上たい事がござります』と云うので、『わしに用とは』と又、元の席へ座る。これから喜助の意見があつて、貢は『古主の恩を忘れぬそちが心底、何を隠そう今の一腰は予て尋ねた青井下坂、其折紙を詮議の為此処へ来るのじゃ、放埒ではない程に、心遣いは無用にしやれ』と打明けるので、喜助も安心して『久し振で私が庖丁、一ト口お上りなされませ』と云う。『そんなら喜助』と立上る、喜助が『若旦那』、貢が扇をサラリと開いて、『来い来い来い』と世話に砕け、扇で軽く三つ招き、『よさのとまりは』の唄で、扇遣いをし乍ら暖簾へ入る、喜助は刀を持って随いて入ります。此辺の五代目のうまさは、まだ目の底にえり付いています。その跡へ藍玉屋北六が出て、下坂の刀の中味を入替えて入る事。蔭でこれを見ていた喜助が出て、『間違いたつもりで、若旦那へ此刀をお渡し申せば、跡へ残るはなまくら物、おっとよしおっとよし』と、『草を敷寝のひじ枕』の唄で奥へ入って、掃舞台になります。

爰へ暖簾口から出て来る貢は、古い型では羽織を着た儘に出たもので、六代目も初日には其型で見せましたが、二日目から羽織を脱いで出る事にしたのを、又改めて羽織を着た儘で出て、一度門口へ行って格子を明けて、『万次郎様は、もう見えそうなものじゃなア』と云って羽織を脱ぎ乍ら元の席の、煙草盆の置いてある前へ座って、懐中から『袂落し』の煙葉入を取出し、銀の延べ煙管で煙草を喫みます。

其処で縁まわし騒ぎ合方の鳴物になり、正面の暖簾の間からお鹿が顔を出します。これは顔を出して一度引込めて又出る型と、最初後ろ向に出て改めて正面向きに出るのとありますが、いずれにしても小ぎくの懐紙で煽で出るのが紋切形で、その紙を丸めて貢へ投げるのも昔からある事。五代目が旅で貢を勤めた時、弟子の梅助がお鹿をして、此丸めた紙を、貢の襟の中へ投げ込んで了ったので、『色身の貢を台なしにしやがる』と、大層怒った事があったと云います。お鹿は貢の下手へ来て座り、『貢さん、きつと嬉しいぞえ』と朱羅宇の長煙管へ煙草をつけて出すので、貢は扱は万野がお鹿を替り子によこしたものと気付き、『そんなら万野が、アノそなたを……』と意外な思入、お鹿は『あい、お紺さんと云う馴染のあるお前に、何の彼のと言掛けたは皆んな私が悪性なれど』云々と恥かしき科、貢はお鹿から『度々上げた文の返事』と云われて、合点の行かぬ思入、『そなたの方から状の来た覚えもなし、又こっちから返事した覚えもない』と云うので、お鹿は『今更そんな事言わしゃんすとは、そりゃ卑怯でござんすわいなア』と云います。

此時後ろの暖簾から、お紺が出て貢の左脇へ立ち、貢の左肩の後ろへ軽く深草団扇を当てて押すので、貢は振向いて顔を見上げ、『お紺か』と云うと、お紺は『貢さん、きつい派手な事いなア』と、団扇遣いをし乍ら稍上手へ行つて座る。此処をお紺が立った儘右膝で貢の肩を突く型もあります。此場ではお紺と万野だけが鉄漿を付けるのが定めです。

『伊勢に遊ばば』の唄、踊地の鳴物になり、奥より岩次、北六、次郎助が出て、『酒を持って酒を持って』と云うので、お岸始め仲居、若イ衆大勢付添って出て、座布団を敷き各々膳(昔は朱塗りの台の物)を配り、皆々の位置が定つて酒宴になります。

貢が『お紺、そんなら我身は内にいたのか』。お紺『知れた事いなア』。貢『その内にいるものが、何でまだ戻らぬと、万野に嘘をつかせたのじゃ』。お紺『それを私が知ろかいなア』と云うので、岩次や北六等が貢の事を『箒客』と罵る。貢はむっとしてお紺に言訳をする心で、万野が無理から替り子を呼べと云った事を述べ、『こんな者をおこしたのじゃ』と、開いている扇の先きでお鹿をさす。お鹿は『お紺さんの前じゃと思うて、そんな事言わさんすと、皆さんの聞く前で、有様に言わねばならぬ』云々、『今となつて覚えがないとは、そりゃ胴慾じゃ胴慾じゃ』と泣くので、貢は『まざまざ敷事を言い居るわえ』と取合わないのに、お紺が『如何に私への当付じゃとて、お鹿さんを呼ばしゃんすとは、あんまりな事、もし皆さん、おかしいじゃないかいなア』と云うので、岩次等が『蓼喰う虫も好き好きと云おうか、コリヤ余ッ程のへち物喰いだ』と嘲るので、お鹿は腹の立つ思入、左の片膝を立て上手へ気組む形、合方になって立上り、団扇遣いをし乍ら、貢とお紺の真ん中へ来て座り、『——何ほ蓼でもへち物でも、切れる所に切れやんす——』云々の長台詞で、貢に入揚げた事を云う。お紺は此金の話の件だけ、一寸疑いを以て聞くのが心得になっています。それから貢はお鹿の方へ向直つて、『貢に金をおこしたとは聞捨てにはならぬ訳を云え云え』と半開きの扇で、畳を叩いて詰じる。お鹿は訳を言うより証拠があると云つて、奥へ入つて手箱を持って出て、貢の下手へ座つて手紙を出して見せる時、古い型では芝居の番付の外に、人形を出したり食べ物の受取が出たりしたものでした。それから五両、三両、二両の無心状を読上げるのを、

五代目は一通一通手に取って見てから、『コリヤおれが手じゃないわい』と云って、『これには誰ぞ仲立があろう』と云う。お鹿が『あるわいなア』貢が『その仲立は誰じゃ』。お鹿『その仲立は』。貢『その仲立は』と急き立て、お鹿『仲居の万野じゃわいなア』と云う。貢『ナニ仲居の万野じゃ』。お鹿『あいなア』貢『万呼べ、万呼べ万呼べ、万野呼べ』で、六代目も初日だけは、羽織を脱掛けた見得をしましたが、その後は前に述べた通り羽織を脱いでいて、右の『万呼べ』の台詞を写実に云うのは五代目の型、大時代に『万呼べ万呼べ、万野よ一べー』と延すのは、菊五郎系ではない型です。

お鹿が手を叩いて万野を呼ぶので、後ろの暖簾から万野が団扇遣いをし乍ら出て、貢とお鹿の間へ座るのを、お鹿と貢が双方から膝へ手を掛けて引廻して、替る替る手紙の事金の事の根問いをする。万野は『皆んな貢さんに渡したわいなア』と云う。貢が『そりゃいつの事……』。万野『跡の月の差入れに』。貢『何処で』。万野『初手が奥の四畳半で、次ぎが此店先き、次ぎが中の間で……』と、真顔で嘘を言募られて、貢は万野の顔を見乍ら、両手の人差指を互い違いに差して、『アア、ア』と呆れば、万野も亦貢の方へ、人差指を互い違いに指して、『ア、ア、ア、』と云い、二人で『あんな事を……』と呆れ合う。爰でお紺が口惜く万野を見ている目と、万野の目とが合って、万野は『ああ聞えた、お紺さんが聞いてじゃに依って……』と、一層威猛高になり、『知らぬの何のと白々敷、お前も余ッ程白贖じゃなア』と、憎々敷言って貢の右の頬を団扇で突く、貢は膝に置いていた左手を畳へ落とし、右手で頬を抑えて極る芝居をするのが五代目の型。六代目は万野の団扇で右の肩先きを突かれて、一寸口惜しい思入だけで、『わいら寄って、言い掛けをするのじゃな』の台詞も、サラリと写実に言っていました。そこで万野が『それ程覚えのない者が、何で此無心状をやらしゃんした』と手紙を突付けると、貢は『こりゃおれが手じゃないわい』と突返す。万野が『人に

書かしておこさんした事、それを私が知ろうかいなア』と、手紙を捻じって貢の顔へ投付ける。貢が堪え兼ねて刀を抜く心で帯へ手をやると、刀がないので畳の上を一寸探し、其処に置いてある扇を持って立上り、ビリビリと二つに破って左側へ当て、大小の柄を握った形のツケ入の見得が五代目の型。六代目は膝の前に置いてある扇を、すぐにとって立上って破る順序の見得でした。

万野は、『お前私を打つ気かえ』と、貢の立っている右足へ寄り掛るようにして、『どうなとしいどうなとしい、どうなとしーい』と体を擦付けて言う。貢は無念を堪えて、『女を相手に大人気ない、此礼はきつとするぞよ、万野覚えていい』と、右足で万野を蹴返し、座ると共に扇を捨て、両手を膝へ置いて極る。上手に此体を見ている岩次などが、『女郎を欺して金を取るとは、大方あれが伊勢乞食と云うのであろう』と皆んなで笑います。

比時貢は左手に煙草入を持ち、右手に煙管を持って煙草を詰め乍ら、『身不肖なれども福岡貢、女を欺し金を取るような所存はない』と、煙草入を離して煙草盆の手を持って持上げ、『ナーニ、バ、バ、馬鹿な事を』と、右腕を一寸張り加減にして、手先きを震わせ乍ら、煙草を火の所へ持って行くのが、『ガチガチガチ』と、陶器の火入へ当って音がする。爰で貢

が煙草へ火を付けないうちにお紺が『そう潔白には言われますまい』と云うのが心得です。それは煙草へ火を付けて了うと、跡の煙管の取扱いに火玉の飛出すような事があると困るからです。そうして貢は『そりゃ又なぜに』と云って、煙草盆を下へ置いて、煙管を持った手を、右の膝頭へ乗せてお紺の方を向くと、お紺が『お鹿さんと訳もなく、金も借らしゃんせぬお前が、何で今宵お鹿さんと呼ばしやんした』云々、『お前じゃお前じゃお前じゃ、お前でござんす、トサ私でさえも思うもの、外のお方は尚の事』の所、台詞の切れまでに、貢はお紺の言う事を否定する心で、煙管を持った手を前へ出し、お紺の台詞に押されて、その煙管を落すのが五代目の型です。六代目は『そりゃ又なぜに』で、煙管を落して膝へ手をポンと置いて、お紺の方を向いて極りました。又お紺が『お前じゃお前じゃ』の台詞で突く長煙管は、斜に突けば色女になり、立てて突けば女房になると云って、五代目がやかましく教えた口伝になっていて、お紺の煙管の扱い方に、四通りの区別が定められています。尚其末の『私や爰へ消えとうござんす』と爰で始めて泣くのも型です。

貢が『其腹立は尤なれど、これも皆万野めが』と、万野の方を見ると、万野が喫掛けていた、煙草の煙りを吹掛けるので、貢はむせるのが五代目の順序です。それから貢は『云えば云う程馬鹿になるわえ、もう何にも言う事はない、追付け国へ帰れば元の身の上、其時こそはそなたを受出し、武士の女房じゃ』（此跡へ『お紺そじゃないか』と入れて、右手を左の袖口へ掛け、左手を逆に下へ突く色身の形は、別に彦三郎の型として伝えられている）と云うのを、お紺が『いやでムんす』と云切って、武士を嫌う理由の長台詞がありますが、型に関係がないので省く事にして、とどお紺は『お前がならずば私もいや、そうじゃないかいなア、岩さん岩さん、寝た顔せずと、起きいなア』と泣く心持に言って、団扇で顔を隠して、態と寝ている岩次の傍へ寄添う。貢は左膝を立てて気組んで立掛ける、お岸が団扇で畳を叩いて止める、貢は立てた左膝を元へ引き、左手を襟先きへ掛け、右手で上ん前をこき下ろして、右膝をトンと突き両手を膝へ置いて、ツケ入の見得で極るのが、胡弓入の合方の掛りになっていますが、五代目の時は、前の愛想づかしの所へ、胡弓を遣ったように覚えています。そうして此愛想づかしの間、お紺は貢の方を見ずに、煙管を突いて、元の芝居で云えば、東の棧敷の三へ目をやっているのも、心得の一つとされています。

貢は『われが侍が嫌いなら、わしも町人は大嫌いじゃ』と、尚もお紺の方へ行き掛けるのを、万野が遮って『大事なお客のあるお紺さんに、指でも差して下さんすな、とつとといんで貰いましょう』と云う。貢も『居ろと云うても斯んな処にはいぬ、オオそうじゃ、羽織を出せ』と云うので、お岸が畳である羽織を持って来てうしろから着せ掛けると、今度は腰の物のないのに着⁽⁷⁾が付いて、『腰の物をおこせ』と云うのを、万野が『わしゃ知らぬわいなア』と顔を反むけるので、『最前われに預けたじゃないか』と云うと、万野『お前喜助どんに預けたじゃないかいなア』と云われて、ウムー（と語り）、『喜助を呼べ』と頼むと、『お前呼ばしやんせ』と断られ、『そんな意地の悪い事言わずと、呼んでくれ……』。『お前呼びいな』。『喜助喜助』と呼ぶ、喜助が出て、『何ぞ御用でござりますか』。『腰の物をおこせ』。『へいへい畏りました』と奥へ入り、刀を袖の下へ隠して持って出て渡す。貢は腹立紛れに

それを引たくるように取って差し、格子を明けて左足から外へ出る時、お紺が『貢さん待たしゃんせ』と云う、爰は貢の方を見ていられないだけ、間を合せるのがむずかしい事になっています。お紺の方へ体を振向けて、門の柱へ右手を掛け、『何ぞ用か』と聞くと、お紺が『もう是切でござんすぞえ』と云って泣き伏すので、お紺の泣くのは以上に述べた、三個所だけが定めです。貢は『是切もすさまじいわえ』と云う。其処へお鹿が来て、貢の胸倉を取って、『私の方はどうして下さんす』と云うのを、横面を張るのでお鹿がタジタジとなる、万野が入替って貢を突出して門口を締める、貢思入あつて少し跡へ下り、格子に添って様子を窺っている、中の万野そろそろと格子を明けて、表へ顔を出す所を、貢は痰を吐き掛けて格子を締めて極るのが只唄『松に吹き来る』の掛り、花道いつもの所まで行って無念の思入、刀の柄へ手を掛けてブツと気が付き、『万次郎様に逢いたいものじゃなァ』と、右手から左手と両袖で刀を囲うように抱き、右左と段々に首をうなだれ落し乍ら、踊場の鳴物に軽く乗って、次第に足を早めて向うへ入る、此踊場の間を持つ三味線の弾き方を、やかましく言ったものでした。以上は五代目の大体の演出法ですが、六代目のはずっと簡略に運んで、お紺が『もう是切でござんすぞえ』と云うと、『お紺覚えていい』だけで、万野が羽織を投出して門口を閉めるので、口惜しい思入で極るのが踊地の掛り、羽織を着乍ら花道いつもの所まで行って、刀の柄へ手を掛けてはっと思つて気を替え、段々早足に向うへ入る演出でした。此油屋の場の貢の性根は、言うまでもなく辛棒立役で勤めるのですが、長丁場の間に、幾度も相手が変わるだけ、相手が悪いと殺され勝で、やにっこい腕前では、持切れない大役になっています。

此跡で徳島岩次と藍玉屋北六が、入替っている事の説明、又お紺が北六の持っている折紙を手に入れる件、北六がすり替えて置いた青井下坂の刀が、却て貢の手へ渡つて了った事等の筋があつて、喜助に其刀を取返えしやる、その喜助は貢の家来筋と分つて、又万野が取返えしに行く事になりますが、貢は途中で刀の違っている事に気付いて引返えして来る処、掃舞台の奥で『サアサア音頭の始まり始まり』の声、本釣鐘を打込み舞台裏で『待宵』の前寂きを聞かせ、これを下座へ取つて唄入『待宵』の替唄、『曲水の流れに浮ぶ盃に、千代を籠めたる千代見草……』になります。昔は爰で『さくら花』と云う音頭の唄を遣つたものでした。

向うバタバタになり、貢は左の手を刀へ掛け、右手を振って下げた形、駈出して出てすぐ舞台へ来て、内へ入つて『喜助喜助、万野万野』と呼び乍ら、正面の暖簾を引取り、(古くは『サアサア音頭の始まり始まり』で知らせに付落したもの)廊下の下手の刀架に掛けてある刀を、四五本一緒に持つて右の小脇に抱え、舞台上手に置いてある、棗形の行灯の所まで持つて来て置き、左膝を突いた形で、一本一本中身を半ばまで抜いて裏表ともに調べ、いずれも違っているのでイライラとする。此時寝間着姿になつたお紺が、二階の葺戸を明けて出るので、貢が其顔を見て、『ム、わりやお紺』と云う。お紺『私やどうしても侍は嫌いでござんす程に、書いて置いた此退き状、取つて置かしゃんせ』と、紫の袱紗包を投出すので貢はこれを取つて見ると、中から折紙が出るので『コリヤこれ折紙』と二階を見上げる、お紺葺戸を

立切る、貢は折紙を持った右手に、一寸左手を添えた形で極ります。お紺の役の心得としては、袱紗の中の折紙と手紙の飛出さないように、包み口を糸で留めて置く事、又折紙を取出す時に、手紙の落ちる手順に包んで置くのが口伝になっています。又彦三郎の型では貢が立って行灯へ掛り、手紙を滝流しに落すのも、別に有名なものになっています。

五代目の貢は手紙を披いて、『人目はげしく候故、退き状と偽り認め申候』云々と、丁寧に読んだ上で、『そりゃ折紙を取返えそうばかりに……』云々との台詞になりましたが、六代目は手紙の文章を全部略していました。そうして手紙と折紙を袱紗へ包んで懐中へ入れると、向うバタバタになって、万野が花道から帰って来て、貢を見て『オオ貢さん、その刀こっちへおこしなさんせ』、貢が『身共の刀を渡しおろう』と云うような問答があつて、万野は貢の持った刀を取ろうとする、貢は渡すまいとする、五代目は此辺も頗る丁寧に欺したりすかしたりの台詞の結果、鞘ごとに打つ段取で、万野が『本間に打ちなさんしたな、サアもっと打ちなさんせ』と体を寄付けて困らせる、貢に同情のある演出でしたが、六代目のは争はずみに、万野の左の肩を打つ、万野が『ア痛ッ』と触って見て、手先きへ血糊が付くので、『コリヤわしを切らしゃんしたな、人殺し』と大きく云うのを、入替って貢が下手になって、後ろから左手で万野を抱くように口を押えて、『何を云うのじゃ……』と云い乍ら、右手に持った刀を見ると、仕掛けで鞘が破れているので、ブツと驚いて万野から手を離す、万野が又『人ごろ……』と云い掛けるのを押えて、『是非に及ばぬ』と壊れた鞘を振落して、右の肩先きを斬下げる手順です。五代目は『こりゃ手が廻ったか』と、刀を震わせて鞘を落とし、観念をして斬るなどの科をしていました。万野が上手の奥へ倒れるので、貢はブルブルと身震いをするのが本釣鐘、ヘタヘタと尻餅を搗いて、左手を後ろへ突いて極るのが、『曲水』の音頭の掛りで、肩で息を切る仕科をして、始めて人を殺した恐怖の有様を見せます。

以下合せての九人斬りにも、五代目は種々の工夫を凝して、二階に寝ている北六の首を切り、其髻を持って本首を出して見せたり、万野を斬ると片腕がニョッキリ舞台へ立って、それが、バタリと倒れたり、お鹿の顔を切るのに『そぎ仮面』を用いたりしたのですが、爰には六代目の簡単な演出振りの方を記して置きます。

初め行灯を左手に持ち、浅く腕まくりをした右手へ刀を提げて二階へ上り、葎戸の中で寝ている北六を足で蹴起し、刀を振上げるので北六が両手を上げて防ぐ形、其処を右肩を斬下げて殺し痰を吐掛け、行灯を持って二階を下り、行灯は元の所へ置く。下手の衝立の蔭から、油屋の若イ衆が棕櫚箒を両手で持って出て、上手へ一度奥へ一度打込んで行って外れる、貢は見物に背中を見せた形で刀を打下ろす、若イ衆はこれを箒で受留める、貢ウンと力を入れるので箒が切れて、箒の竹の中に仕込んである血糊を浴びて倒れる。上手から仲居の千野が左手に提灯を下げて出て、貢が刀を持っているのを見てヘタヘタとなる、貢は千野に逃げろと云う心持で、力を振って指図をする、千野はいざり乍ら下手へ行き、漸く立上って『アレー』と声を出すので、貢は『シーッ』と刀で制るのが、腕へ触って提灯を持った左手が切落されて倒れる。上手の奥から次郎助が酔覚めの水を求め乍ら出て、貢を見てヘタヘタとなり、上手へ逃げ掛けるのを、後ろから斬下げる。次郎助は二階の階子へ上り乍ら倒れる。上手か

からお鹿が寝間着姿で出て来て、貢の刀を見てへたへたとなり、助けてくれろの意味で、拝み乍ら下手へいざって行き、衝立の処で右左へ身を替して逃げようとして、衝立の上へ首を出す所を一刀に斬下げる。最後に岩次が刀を抜いて立現われ、『おのれ貢』と山形に打って掛るのを入替え、眉間を切下げてヨロヨロと上手へ行き、行灯へつかまって刀を振上げた見得が木の頭、岩次は受太刀の形で下手へ入る、貢は此跡を追って入るのが一ト通りの手順、以上の立廻りは貢の腕の冴えを見せるのではなく、下坂の刀の切れ味の冴えを見せるようにする事。此間『待宵』の替唄『千野ふる伊勢の神風打寄する、女波男波の女夫連れ……』を唄っています。

舞台が廻る中程より早渡り道具が止ると音頭唄に柄太鼓とチャップアの鳴物、大道具は軒に紅地へ九枚笹を白抜きにした提灯を掛列らねた手摺り付の渡り廊下(俗に通天)の模様、すべて油屋奥庭の体、爰へ花道から出る貢は、着物の着方を乱し、浅く腕まくりをした形、鬘を一はじきに掛替え、着付へ血の手形及返り血の滲んだ詠、油屋の若イ衆二人、これも白地の浴衣へ血の染みた拵えで、始めに一人がよろよろと逃げ出して出て、此跡から貢は右手に刀を提げて持ち、左手で一人の若イ衆の襟髪を取って出る。此二人の手負いの事を、俗に『血達磨』と云伝えられていますが、花道の立廻りの中、血みどろの若イ衆が見物席へ、落込むようにのし掛るのを、貢が其襟を取って引戻して、刀を振上げる形など五代目以来の型の一つで、見物を怖がらせる趣向であったのですが、其筋の注意に依って改められ、六代目の演出では、道具が止ると廊下の上へ、下手から二人の手負いが出て、一寸立廻りがあるって一人が庭へ落ちる、貢は上手寄りの柱へ搦んで、刀を振上げた見得で極り。又一人を上手の段から落して、貢は階段へ右足を落して力を振上げた見得。貢が庭へ下りてからは、廊下の下で二人を殺すだけに終り、二人を重ねて置いて芋差しにするなどは、惨酷と云う点から廃されましたが、九人斬の数だけは合せてあるのです。

爰へ上手からお紺が出て来る、貢は一寸刀を振上げるが、お紺と云う事を知って肯き、左手の指で自分の口をさして、水が欲しいとの心で、お紺は心得てつくばいの水を柄杓へ汲んで持って来て、上手へ座る。貢は下にいてそれを飲もうとするが、右の手の刀が離れない仕科を二度して、三度目に肱を地へ打付けて、漸く刀が手から離れて水を飲む。お紺が『貢さん、ひよんな事して下さんしたなァ』と云う。貢『斯く大勢をあやめし上からは所詮生きては……』と、刀を取って腹を切ろうとするのをお紺がとめる。下手から喜助が(提灯を持つのもある)駈出するので、貢は立上って刀を振上げる。喜助が『そのお刀が正真の下坂でござります』と云うので、『あかりを持って』と言付け、喜助がつくばい脇の灯籠を持って来るので、貢は刀をかざして見る模様、その火影で、刀の烏帽子先きから鏝際まで見て、『是ぞ正しく青井下坂、折紙までも手に入ったか、チェー忝い』と押戴く。喜助が『若旦那お目出とうござります』。貢『喜助』と刀を差出すのを木の頭、喜助は膝を突いて下手から手拭いで刀を拭う形、お紺は上手から中腰で貢の腰へ付く、立ち身の儘踊り地早めの合方に薄く風の音を冠せて幕です。

尚参考の為、特に『二見ヶ浦』と『油屋』の場の『鳴り物附け帳』を公開します。役名を書かずに、俳優の名前を記してあるのと、キッカケを記入してある等、これは『附け帳』の書式です。昔は此種の附け帳は、鳴物師の苦心の秘録として、譬え仲間内の者が借用を申込んでも、其場合は『荒附け』と称する、単に『唄入合方』と記しただけで、何の唄を遣うのか、何の合方を弾くのか分らない物を貸与えた位、大切なものとして取扱われ、俳優も亦鳴物師の工夫を尊重して、濫りに口外はしなかったものです。

『伊勢音頭恋寝刃』鳴り物附け帳

○二見ヶ浦の場

幕明き

一 浪の音

明くと菊五郎（貢）、福助（万次郎）の出

一 時の鐘

一 只合方

一 浪の音

二人舞台へ来るととまる

高助（大蔵）の出

一 早ぜん

菊五郎『惜しい事をいたしました』

猿之助の出

一 同じく

猿之助（林平）入るまで

一 浪の音

菊五郎提灯を落す

一 ごん

一 忍び三重頭

一 木の葉合方

一 浪の音

猿之助万次郎の手を取るまで

アト

一 浪の音

猿之助『ござりませ』

一 送り三重

猿之助福助入るまで

アト

一 浪の音

菊五郎まるき〇と、だんまり

一 時の鐘

一 木の葉合方

一 竹笛浪の音

菊五郎『嬉しや日の出』まで

木に付き

一 馬子唄（伊勢は津で持つ……）

一 駅路

一 浪の音

幕

○古市油屋の場

幕明き

一 唄入踊り地（『花に遊ばば』の替唄、『伊勢に遊ばば、土地も古市玉揃い、東方南方西方北方、すいも不粋も一』云々

梅朝（千野）『来て下さんせ』、菊五郎出

一 同じく

梅朝『はてごさんせいなア』

一 踊り地

梅朝入るまで

多賀之丞（万野）の出

一 流行唄（秋の七草虫の音に……）

刀の件、くり上げまで

猿之助（喜助）『わしが預かりましょう』

一 同 合方

猿之助刀受取るまで

多賀之丞『今行くわいなア』

一 同 唄入（……残る蛸が身をこがす……）

多賀之丞入るまで

菊五郎『来い来い来い』

一 唄入（『夜さの泊りはどこがとまりぞ』）

照蔵（徳島岩次実は藍玉屋北六）『おっとよしおっとよし』

一 同じく

猿之助『おっとよしおっとよし』

一 同じく（『草を敷寝のひじ枕』）

猿之助入るまで

- 菊五郎『見えそうなものじゃなア』
- 一 ふち廻し
 - 一 騒ぎ合方
 - 高助（お鹿）『どうよくじゃ』まで
 - 梅幸（お紺）『派手な事な^(ママ)リヤ』
 - 一 踊り地
 - 皆々『へちもの喰い』まで
 - 高助『聞いて下さんせ』
 - 一 騒ぎ合方
 - 菊五郎『なかだちがあろう』まで
 - 高助『まんやまんや』、多賀之丞出
 - 一 踊り地
 - 多賀之丞『しらにせじゃなア』まで
 - 菊五郎^{まる}き〇と
 - 一 ひなぶり合方
 - 菊五郎立掛るまで
 - 菊五郎^{まる}き〇と
 - 一 同じ合方
 - 一 胡弓入
 - 菊五郎刀を受取るまで
 - 菊五郎『覚えていーよ』
 - 一 只 唄
 - 菊五郎花道『スッポン』へ行くまで
 - 菊五郎思入
 - 一 踊り地（乗って）
 - 菊五郎入るまで
 - 入ると
 - 一 同じく
 - 梅幸折紙を受取るまで
 - 梅幸顔を隠すと
 - 一 只 唄（『仇に散らすな』）
 - 梅幸入るまで
 - アト
 - 一 踊り地
 - 多賀之丞『喜助どん喜助どん』、猿之助の出
 - 一 同じく

- 猿之助門口へ行くと^{とまる}⓪
- 猿之助『馬鹿め』
- 一 同じく
- 多賀之丞門口へ行くと^{とまる}⓪
- 多賀之丞『行ってきます』
- 一 同じく
- 多賀之丞入ると^{とまる}⓪
- 蔭の声『サアサア音頭の始まり始まり』
- 一 本釣鐘
- 一 待宵の前弾
- 一 竹笛
- 菊五郎折紙を見るまで
- 菊五郎『こりゃこれ折紙』き^{まる}〇と
- 一 同じく
- 菊五郎『あいそづかしまで』
- 菊五郎『忝けない』
- 一 踊り地
- 菊五郎刀を見るまで
- 菊五郎き^{まる}〇と
- 一 本釣鐘
- 一 音頭唄入（『待宵の替歌』、『曲水の流れに浮ぶ盃の、千代をこめたる千代見草、深き契りを末かけて、ともに白髪翁草、ヨイヤサヨイヤサ』）
- 一 竹笛
- 木に付
- 一 同じく（『千早ふる、伊勢の神風打寄する、女波男波の女夫づれ、ぬしに誓いを辻占に、きくもよき琵琶抱き柏、ヨイヤサヨイヤサ』）道具替り中まで
- （此以前は、『さくら花』の音頭を用いしが、今回は『待宵』の替唄として、『主を待つ、二見ヶ浦に寄る波の鳴くぞ鷗の二つ三つ、いつか暮れ行く月あかり、沖に見ゆるは女夫岩ヨイヤサヨイヤサ』を使用せり）。
- 道具替りの中より
- 一 音頭太鼓（早渡り）
- 道具^{とまる}⓪と
- 一 曲水の音頭唄
- 一 柄太鼓
- 一 チャッパ
- 菊五郎水のむまで

菊五郎『そうじゃそうじゃ』三下り、猿之助の出

一 早め合方

一 薄く風の音

菊五郎『あかり持て』刀を見るまで

木に付

一 踊り地

一 早め合方

一 薄く風の音

幕

(昭和二十三年七月・東京劇場所演)